

創作

恒人連書

五文

大正八、四



狂人を連れて

本田喜雄

「ためた、眼が死んだ」

倒れたまゝ山打の目蓋を橋干開け、瞳孔を覗つて五右衛門が、顔を板つて、顔を板つた。

「未だ、熊鷹はあるんだ。けし」五井は、山

打の物を、さうして彼の胸に刺さへ、さうか、死——」

「軍の無りぬたな女、てんた砂漠心——」

そつちなく言つた本田の言葉が、煙け爛れた

砂を染めた空の一角に、私と耳を響つて回つた。

それから一時、たうたう、山打が目に

落ちて飛んだ。律子に、砂漠に入つて三日目である

そつちで暫く、私等生残者四人、密行者は

、砂塵に陽炎、灰色の風景に包まれて乾燥する

山打の死影に、無言の念佛を数けた。

「埋めやうがやうか」五井が言つた。

「何、埋め」本田が真顔で訊ねた。

「埋め、必夏あるか。冬か埋め、さ
た、こ、私か言うた。」

「房、言、や、斯うして、研の上には、骨を晒し

てあるのか、何より、俺等、供養して、ち

や、ち、か、

「そ、人、た、れ、置、な、こ、か、也、来、る、も、く、か、」

「谷口、お、の、れ、か、か、さ、や、う、な、態、度、で、言、葉、を

「~~葉~~さ、う、け、た。」

「ふ、く、永、久、た、く、永、久、に、山、村、を、地、上、か、り、隠、す

と、言、ふ、の、か。君、等、は、解、る、人、の、か、あ、え、後、か、さ

来、た、者、が、急、佛、の、一、つ、を、写、し、了、す、や、方、か、。

俺、は、中、王、二、十、年、も、秘、流、し、た、な、沙、漫、で、死

人、た、者、を、埋、め、た、何、し、が、あ、う、

体、験、に、訴、へ、て、理、窟、を、言、ふ、故、山、に、遊、ぶ、こ、の

不、利、益、を、留、め、ら、う、と、あ、た、し、て、思、っ、て、紙

の、言、葉、に、着、か、ふ、さ、う、い、ふ、あ、つ、た。

「お、私、等、は、山、村、の、死、體、か、ら、水、筒、錢、十、八

兩、を、荷、こ、て、あ、る、夏、勤、勞、を、享、つ、て、放、つ、離、し、に

「~~庭~~庭、と、別、れ、な、昨日、と、同、に、行、行、は、脚、を、重、く、す、り

ひ、き、つ、た。」

を晒してあつた。何より、彼等の山打は方
 向よく着りたる、孰れ又同教師の坊主でも頼
 んで、追悼してやる。と言ふ。いふ。あつた。
 で、新等は、山打の灰髯から水筒、銭十八帛
 、穿つてある長靴等を奪つて、放りつ雜しに
 山打と別れ、昨日と同じ歩行を續けるのであ
 った。

地平線は陽炎に咽つて、展望は絶無だ。カ
 リタス、サオテの散在する焼砂の上を、僅
 かにあるかたかり、前行者の足跡を慕つて
 進む。然しこの足跡さうもが、棲屋加砂を
 煽つて、地平線を一線にすると、もう完全
 に抹殺される。そして、途々方々の行路に、
 快を露出する骸骨が、次の棲屋を待つてある。

其數を思ふのは、單に和共人回に限る。め
 っサオテ、カリタス、ユカ、花崎から、近
 寄つて来る人回の姿に愕つて、小島が、い
 パフと相言を翻して薩から薩へ隠れ込む。小

靴さへ、その砂色の長靴を陽光に晒してはあ
なり。ホントが灰色の甲羅で砂上を這ひ這け
る。

突入国、新生活、昔、總ゆる自由生活の華
を、夢想の上に咲かしてこの生命賭だ。併し、
この砂漠の行経、一步は一刻を足して、砂に
ノマリ込む踵の重さに比例する。膏汗と痠痛
は、行者の苦役を越えに等しい。この生命
の、たゞた一個しか持たぬ生命の粗末者を、
自分自体を、我等は嘲罵した。我等は後
悔、嘆息を一本のカタス杖に託して、諦め
るより外に老、及び無かつた。

「——」
「——」

無言の無言劇を、觀衆の居ない地平線に
対して、我等四人は展開させた。

屢々、我等は耳に、てみたことだが、黒土国
田境から米田に突入国する者は、黙々と
五人に三人は矢張り踏躰やうなる。さもなく

ても、野犬の群に襲はれ、と。この談交
りに用ゐてゐた言葉が、今、現実と化して私
等の身に迫つてゐる。私は、野犬の群を驚か
すこと、空、水、砂の隔別もつゝなれど彼方如く
其の裡から、野犬の群が来りやうと疑ふこと
。途中、巖骨に遭遇すると、自分も砂漠の骨に
なるとは方々かと暢木了。私は、咽喉の乾
枯びを僅かな水で潤し乍ら、眼に流木に吐
砂汗を、指頭で撥おけようとした。

我等は、沙漠に達する、其前に、既に幾度と
なく死線を彷徨してゐた。

春、マカリオンを出發して、ハイパーリを
来り、目に、エコスパー、革命軍と官軍カエス
將軍の部下とか、ソーラ州の至る處で小衝突
を繰り返した。彼等は、我等日本人旅行者の
爲に、決して驛丸を整約しては来なかつた
。それから、今は、盛夏の沙漠を突破せねば
ならぬ。

冬の沙漠は、晝夜寒暖の差、只それだけで
人目を容易に惑すところ、出来た。其上、乾草

と一丁のササニの、実分皆無だ。

春、秋は、冬に最も新しう。心、結局、夏は、砂漠を牧する者には、一針中で一重安全な季節だと謂ふべきであらう。

秋等は七月初旬を境人だ。

五月から秋は、ユートピアの雪解氷は、国境附近の海岸、下の砂漠に、静しう水溜を作つてくたす。そして、砂漠で餓乏の人々には、憎う殺敵したあつたササニの、実分をたたく。あるが、おぬ部をたすと思ひは、七月四日の

米田留之介前後は、国境警戒が手薄である。

国境一、越せば、そこには、日本人の耕作者達、大人数を募集して、山の砂漠に血眼だ

。突入国者達は、この畑から畑へ、移転する。畑から道へ。たか、かうして、不道行の、前

に、死の陰影が、秋等の、精気を消しつ、あつた。死の予感、突然、秋自身に、死の、掛つ時、

秋は、眩暈に、舌を嚙まうとする。そして、小指に、口を押し、盡して、目を死なすやうである。

その夜、秋等は、花、咲き、二本のユカリ

の中間に、形式的な天幕を張つて睡つてゐた。

「いよう、深江左次郎、女郎、女郎の唇だ」
 秋山が、欄干を西窓に這ひ上つた。袖に掛く、雀の羽織きに似た秋山の十厘の音を、
 船は近くへ研で、耳に上つた。船は、カクタス
 の船元に寝ね、夕日の大陽を、あふや、冬日
 船等に接同の青苔をかけた今日の太陽かと、
 多愛な記憶で望見する、ひあつた。

誰もか、寂然に食はね、天幕の外に這る
 寝をしてゐる。越けぬの餘蘆は、天幕一杯に
 床にゐる。

「想ひ出して、しゃうがなり。女女、アハハ
 ニハニの女郎」

アハに秋山が声をかけた。秋山は腹をはた
 けた儘、船の方を向つて

「君、本当か。女郎を買はん言ふか」

「うん。なつあ」

「居座がなあ、先一、男が二十五にもなつて

7
女を識るくちうてとが、あるか。是の冒丁丁、

あふか、秋田は酒井に頭を傾けて、

「なう」と誘つた。

「冒丁丁と、置あまつ」と、秋は珍に父連的に

なり、言ひ切つた。

「女なふか、白頭、ひなうんだ」

秋が、さう言つて右義の下から、秋の性情は

、金身金肉の上をのたうて、女、秋後

か、秋、下腹を引き捲つてゐるかの如く。

「人キと日本人女とは、どうかあふ」

秋山が答へに返つた。

「さうか、答へは、仰向けに寝て出ると重

あゝまた、^更提を提げると、余り疲れた人ひ、

胸が痛つやうだ、肺病かも知れない」

「こ人なけ僕で、肺病はないやう」

酒井が言つた。美加斜に鼻を言つても

二十才か、酒井の産は、彼の顔の上に秋等

には、~~豊~~豊的に仰つた、すると秋山が返つた。

「あつ、酒井、お前には未だ女は熱う人なやう

なふ」

酒井が笑う。また。

「いかにアも三つ子やなかうし、罰う人

筈は無つぢやないの」

「うり言」答口が大言でキメつけた。

「僕の経験ぢや、支那でオレ」

答口を言うぢ。

「さうかなあ、僕リヤ、千ヤイナ一と千ゾと

りはお二人だ。描一とあゝ。僕が一番面白

つぢやあ、こりさかの土人娘だ。五十仙で、

こいつ、まるで髪のもの千ヤしてたう、腰の

思言かう」さう言うて、目も眩し、思ひ出

した身也、秋田は微笑した。その顔が驚か

く僕も、何だか知らず人だ。

「弱」ぢやうた、~~秋田~~、パウカアンの大母には

、こやう、日本人の敵ぢや、全ひなりよ。女

かと思ふぢやあ、もうカニヤリする。後リ

合の無、ここと言うたう、誰も何もありません

め

秋山は、既歎し、述べた。

星群が極めて鮮明だ、静寂と熱気は、上め

ども方く妄想を習うした私は、^{スル}神地へ及受の
節さなるに、何れの中ひ直之する、不氣
味に痛切なる^{スル}苦痛極てゐる、情念、感觸
に及るをも方く想をいへ。

私は、人生生活の習よりなさを失望した。
私は、美道友妻并如と、世目的に神遊した
た。

私は、一本の丸木稿を用心深く度つて来た
が、その本が現在の私に何を與へたか。この
神遊の真中ひ、私を難打ち、私を怒^{イラ}せし。自
己嫌惡に私を壓迫す。それは、快意の幸福
を味つたことの無く私の、情念の堆積ではな
い。何ううか。

秋山、谷口の放浪生活を、一面朝美し乍ら
、他面その生活の豊富さを讚美とではある
が、それ。此等の激流に躍り入るひ、彼等は思
ふがまに足を踏み落したのだ。然し死を睹め
た私の、悲劇の一本道に残さずただ唯一の良心
は、性生活を識る方々人生、葦岸たる私は、
砂に腹這ひになつて、地平線の彼方に茫々た

るゆ漢、無限の天を遙手と踏みぬた。紛
失した女、娼女に撲倒された。私は不快な
留息を課した。ふー、やけに背中でニキ
を押し出すのであった。

夜を脱き来て大ゆ漢は、和か太陽に陶醉す
るのてあつた。私は等水筒を背負つた。田
境五峰午前^{まで}水は絶無だ。

「さあ、誰か声掛けをーた。」

朝は、早春の性塾に溢れぬ。が午後には

秋の病葉だ。

カリタスが吸かす朝^陽がメロメロと覗く。瞳
が光る。陰鬱を拒たぬ烏雲の太陽に並み
こけ死だ。足裏が、破木靴と汗でいがり合
つて始めると、砂を冠う左皮膚の下には、生
根も魂棄もない。眩暈を感じた者は誰にも、
太陽を殺したくなる。ふと、私は^{砂粒の傾}
斜なつたやつて了つた。天幕を捲いた。

「天幕を捲く時、垣根を言つた。
之人な時、鼻息が凝る。」

「子人、バカか。」 其山々苦矣。た。 「澤九
、飛人びる最中に鼻唄を吐き出す。誰を聞か
し。

無茶苦茶に強要な沈黙、他人の并立の上
に空を投げ付けた。

斗處で、我等は、今後は、晝寝て、夜歩く
ことに決めた。夜は太陽の光を付け、方向の
艱念と足跡を失ふが、又それだけ、墨土と
力加う道木をこつて出来た。

天幕の中で仰向けに寝てゐた所は、其田と
谷口の語で目醒めた。同時に、
おする汗と体臭の悪臭に驚いた。悪臭を周囲から

嗅ぎ取った。サオウの草が、天幕に扇形の
蔭を落としてゐる。

「いくら二人の子が居ても、土人の力加が五
つも、矢の度日本だ。」 マンビニヤの語を
聞いた。其山は語を續けた。

税金が掛る位だし。此回安眠が入る位は友
し。若多居た山の中だ。その變り、文明も
重も、手紙も新聞も、又新聞見たことなどない。

然し、何言ふても、人目の生憎にや置る友
 の。急に角、平和に居るや如何よりかし
 だが、百身償つても目に染し白きたと思ふ
 と、お之。矢も楯もない。日本が悲しくなり
 べし。其山は、声を落して、「つまらぬ」しか
 であふ」とか泣いて、歎息した。

暫くして、谷口が、身上を語り始めた。私
 は、全身に汗を滂まをかく、慄き耳を算て机
 のた。

「十七、年如ふ、日本を去るが。バタマの

軍事探偵と聞けただけ、小舟の後は無中に
 飛上つたんだ。敵の大戦が済んだばかりた
 った。大佐に連れられて、バタマに着い
 た。着くと直ぐ其夜、何もかも本も大佐とし
 いが、その軍隊の親分の氣に連れられて本
 の。そのが言ふんだ。「さうか。十七、こ

あかう過休に命令に服するんだ。」「つか、
 日本語は饒舌なことはなぬ。」「つか、所
 出へはなぬ。」「つか、一切土人以外の者と
 話すことは来ない。」「今更、何、軍隊の人

て、乞食するよりいやだ。ハイ、ハイと、竹
 竿に、半分横木をぬき、お辯儀を何處した人
 か、莫迦甚だしい。答へは、怒りく悲憤的
 に産を跳ねまわして、誅すのであつた。

何十人、何百人と言ふるハイが、殺されて
 来た。世界各国のハイが皆、土人の金貨
 百枚、糸巻、服屋、靴修繕人、行商人に交楚
 して擄つてゐるのだ。俺等は、あうエエエ
 からハイおア四十七軍を遣ふ、二十区に割つ
 てあるんだ。その一区に五人位が、俺等を見
 張りするんだ。なう老うて見ろよ。今日は何
 處に砲臺を見えたか、何處の倉に煙草貯
 蔵したか。やれ旗が動いたか守備兵がいの山
 路を隔つてゐたか。そんなことを、毎日、
 木や枝とか永の軒だとか、秘密に報告する人
 だ。木や枝を二つに折つて一つを割くとか
 岩玉にマールを書くとか、百姓家の壁に針
 を一本刺すとか。実情はまう人てゐた。それ
 で、いゝや同じが友達が行方不明になつてゐ
 る人だからやりきれぬ。同じ区域に三ヶ月か

上留ることゝ絶妙になつた。その區域から次の
と移された。そして、ふふ一人の生
命は、三年のものたうた。つまり、三年回
るふふをすふは、至急方々にやうな。後は
二年と一月の道にたうた。

何と、竟久やうな男になあ、この郡郎」
酒井が大聲に言つた。

豊稔、黙つて黙つて五たんなあ、何んが
この郡郎とは。黙して黙して取るに
暫くして、答へは言つた。

「二重橋はうた、二重共助がうたのは、ま
あ、後位もうた」答へは言へうとく「十七
ハオラスふふなう、外國には屋敷り人たふ
うた」、と付け加へた。

大層な西に沈没する道には、三時四時の
時分にあう。それと、私等は智恵をけること
にうた。

近くで御意、爽快な鈴の音を、私は、夢現
の境で育つた。然して、明瞭な意識に遷つた

時、遂に不吉なる感に衝たれた。

その一瞬、私は鈴地を直感した。

鼓動が烈しく方々、私は恐怖に血が顔中

を感した。

「ふふわい」と小聲で、聲に帯びた酒井の

肩を揺すぶった。すうと、その時だった。

（動くな）秋山が「ためて、動くな。ひつこ

く」とうなつた。

秋山は力強く籠った命令心、私は息を唾人で

汗にまみれた全身をまどろかす耐えてみた。

「サリ　サリ　サリ」

鈴地特有な軽めな言葉、過した回なく即答く

酒井は目醒めた。酒井は黙つて、私の方に

首を曲げた。

（復）俺、この野郎、俺の上に口を握つて

みやがさ）

秋山は、悲嘆を鼻声で、呟った。二三分も

経たずか、鈴地言ふハタと上人だ。私は変

な顔で顔を歪めた。その時だった。天幕の

下に覆えわたる谷口が、目醒めた。谷口は、夢

にも鈴蛇を想はね、目醒めた拍子に、取巻を
 左に差し上げ乍ら、上半身を、けうけと起て
 して、大きく吹伸しやうとした。が、
 いやうとした刹那、鈴蛇は、答口の左頸に食
 り垂つてゐた。

「ッ」と答へ、喚びて床の上つた。
 鈴蛇は、食つ付けた儘で、答口の首に尻尾
 を垂き始めた。

答口は、無事で、蛇の頭を揺き外した。里
 血がふくふく吹き出し始めた。おたりは、砂の
 上に投げうたへ、直に這ひ出た。蛇は、
 が、長靴の踵で砂の中に踏みこんだ。蛇はそ
 の足元の鈴を動かして振り鳴らすのであつた。

蒼白になつて、砂の上へつた。答口の
 、傷口に血を吸ひ付り、蛇山は毒を吸つた。
 蛇山は、一振りで、それは里血を砂の上にバツと
 吐き出した。

「おう、僕は死ぬ」
 答口は、大膽に、後を涼すの
 息を繰り返して、答口は、大膽に、後を涼すの
 ちうた。暫くして、答口は、毒を吸ひ、
 蛇の

を意氣した。た。た。是に、顔面神経を二三度瘧
 瘧させた。そして、叫喚するのひたひた。

確かに死ぬる。と私は谷はを思つたが、谷

は血眼に觸れ、和自人狂人になりやう

な恐怖観念に閉ぢた。

谷は狂人だ。

「蛇はどいしな」四方に眼を据へて這へた

（蛇の上を見）

「俺は、あ、俺は——女、女、女にたふ

人だ——和等は、狂人の彼を感じた。其山へ

蛇の上の蛇を指さして見えた。蛇を——~~見~~見

と谷は、「こやう」と淺き声を張り上げた

蛇を顔に上げた。谷は、蛇の頭を眼の裏に

で踏んでみたが、カリフと、蛇の頭計に密着

付た。和等は、其處に取つて、蛇の

頭を食ふた。谷は、蛇を引き割く金に蛇

の頭部を食ふた。蛇の中を、大きく走ら

つた。蛇の血が、蛇の血を同て、蛇の

頭を食ふた。蛇は血が散つた。谷は

左手掌に二つに折れた蛇の頭を、力まか

女に蛇の上は、蛇の頭を、蛇の頭を、

血が酒井の顔に透點に方へ飛散した。酒井
は這顔を一雪餐め、漸に才牛木に神口を
顔を拭った。が、血は前にも増して、醜鬼面
を現れ彼の顔を惨色した。私は思ひあそく顔
に増えた。酒井は拭き落した指よりく、
仕う方々苦み、た。それ又、私は可笑い
つた。

それより、十分間あり。谷口は肩を擦ん
で悶々として、解し、目も無く、兩膝をこ
りこりり痠痛さし、動けなく方へた。

死んだ。――私は等は、谷口の身中に才牛木
つた。頭、腹、口、血を拭った。二本の爪跡が
鮮やかに目に食ひこくいゝ。未だ血が流
出た。それを見ても、又、酒井は泣き声を
した。私も顔に悲定をいり、上へ下へを
ひくすくすも、それ方へた。

評し、血、後、裏方へた。其日、矢張り
に取ります、た。

ひくすくすも、それ方へた。後、
後、二時同も、蛇と比較して、苦しく

ゐた人だ。山は泣き泣き唄うた。
。「ハヤコビ教士」だと思つて、落して来た。
。偉い人だ。

灰だ。この多量な自然の幸福に、私は
身震うた。後は死んではおくれ。私は
死んでおくれものかと鞭打つた。

大陽の光で、天幕を巻いて、おれが中を
を歩いた。

埋め方（ヤカ）

私は、おれが、おれに訴へた。

——

私は、おれに訴へた。来た山おれは
おれ、おれが、おれに訴へた。おれは
おれ、おれに訴へた。おれは、おれに訴へた。
おれ、おれに訴へた。おれは、おれに訴へた。
おれ、おれに訴へた。おれは、おれに訴へた。

（おれ） 私は、おれに訴へた。

死んだおれは、おれに訴へた。おれは、おれに訴へた。

おれは、おれに訴へた。おれは、おれに訴へた。

おれは、おれに訴へた。おれは、おれに訴へた。

我等は、カリタ人の杖にすがつて歩いた。さ
うしての裏が唯一の食料でゐた。その日の
日の夕方、我々が下痢と腹痛を訴へた。

「ガボテン、一食はよく、腹が痛む」

我々は引つちき無に大食を仰ぐた。

和と西井は、彼の色腹の害に成り居ても

か、我々が器人い甲を達する迄くのガボテ

ニの落を同調するた。

へりへりに弱りあつて、生汗に泳ぐ様に

驚いて、我等の後方から集つて来る我々を

留めると、彼の年が新たけに、場小に廻は

るた。朝の三時、言ふ涼しの夜中に

「うう、もう歩けぬ」さう散逸を思ふ

我々は、砒の上に入らなうまうた。

水を飲め

酒井は肩から水を吊るして歩いた。

「あつ、暫く歩くと、我々も歩けぬ」

あや、空くと同様に、我々は歩けぬ

線に、汗の多く白光を起めた。

「理想は、やあ、我々も歩けぬ」

を撫で、その方面に瞳を見送りながら「田舎が

し、偏し、その土地はよく力が抜けぬた。

「さう、大人が」酒井が心算して認めた。

「お宝に」^{いさ}「さうして」それ、彼は、とこもくろく

。今朝は此處で宿やう。」

和等が顔を見上げ、何うか「馬」和等叫に

「馬」和等が顔を向けて

も、田舎迄、五ふ里やうく」^き「さう

暫く昔時、袖の上には馬年——と五たが、大馬

が^馬「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

「馬」和等に、天幕を延べた。夜を担ぐ

う
た
ゝ

女
子
一
よ
e
4

一言つて、
 天竺の方々を
 見やう

萬
 一
 無
 日
 何
 忘
 リ
 書
 付
 在
 〇

佐田ノ腹中をもんりやうに。併し佐田の腹中
 は同じく侵を待たし〜み、やうに。併し。

秋田は、又、又、
あ、あ、
と、口を命ぐゝ、
生息

と、共に、生に實の息を吐く。生れ、その
を、生きた人の持つ死の氣息は左にある

水
秋田
中事
小量の水を
飯人

7

手を舞々に
上り

私等以懷在久手在

たの
和
付
板
木
に
感
じ
お
う
し
た
。 外
ろ
も

一
時
目
た
)
た
。

2
7
2
.

秋山は、
両手事を
胸の上に
乗せ、
口を肩の

て、
 彼の「^ミ花の^{ハナ}
 魂」の
 題に、
 涙を
 傳えた。
 弱
 にも
 唇

上毛、平常の佐味に
新しき味に
佐味に

乙
 日
 友
 々
 天
 逢
 知
 酒
 井
 加
 河
 本
 八
 二
 乃
 千
 万
 千

山
の
眼
の
糸
を
拭
て
や
う
に
お
す
る
と
一
た
か
き
な
る

半等も
⑤
フ
だ
い
り
。

そ
こ
で、
和
は
数
を
ふ
つ
と
耳
に

七
七
七
七

何々、言フたフてたあ方フ
と認つた

遺言七訓
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、

3
9
7
4
7
T
0

何方、言ふた方、
泣き声、海井、

収
マ
た
フ

大田は頭を擡げ
て

暫く
控へ
て、
又少
しと
なつた

7
 4
 7
 7
 12
 2
 12
 2

何に、
+ 1 4、
は、
+ 1 4、
酒井、

田の耳に口を寄せて言ふと、

士
一
千
一
二
七
四
五
六
七
八
九
十

河井は、暫く、
和₉ 趙₁₂ 田₁ 志₇ 志₈ 市₁

また、
急によち上つて、
天幕の外にまゐり出

した。
酒井は、
ササニの
美を
所愛と
す

た
サハ
リ
の
身
を
細
く
切
て、
酒
井

15
4c
12
3
—
4
5
6
7
8
9

15
3
+
1
4
+
1
4
~~25~~
L

4
 4
 9
 5
 12
 、
 4
 12
 4
 1
 4
 4
 7
 0
 4
 4
 12
 2
 2

リ
徳
多
た
の
い
を
効
不
十
う
と
数
め
た
。
カ
郵
不

た、
た、
卵、
4
分
4
分
舌を
動かし
て、
サ

お
二
一
の
実
を
かん
き
き
た
。
分
不
本
後
前
に
サ
レ

ニ
ク
味
を
知
つ
こ
う
に
な
る
か
ら
な
ら
ば
何
も
受
け
な
い

此
 方
 の
 大
 三
 三
 〇
 八
 等
 は、
 群
 の
 八
 等
 の
 八
 等

貝子)と云ふ。銀田は、何れ小交を止せし
た。それ故に多分一りつた。腕を拘ると、腕
は肩を拂ふと云ふ、それ故に無り。一死た。
和日矢沖いたやうに船矢一、坐の上は仰
向きに寝静うた。

突然、酒井が大声で笑き立てた。

「俺等も死ぬ。」「あ、教士も人だ」

「あ、」和は首の言等が也方なうた。

「あ、」教士も。酒井は、和山の死體に

向う、坐に本陣、特、死體に等々を合

へ、特、たうた。酒井を見ても、和自

身、多分を感、死の恐怖に等々と云ふ

のたうた。

「酒井、」教士も。和は咽喉が也方なうた。

理由知うた後、酒井は、和の死を感、

酒井が、和の死を感、和の死を感、

又、和の死を感、

「あ、」和は、和の死を感、

和の死を感、和の死を感、

和の死を感、和の死を感、

て、昂斗、美佐、和、斗子、持、糸は、河井
を、器の頭、片、う、引き、招、り、観、した。源、を、て、も
酒井は、泣、き、泣、き、と、便、を、敷、く、う、て、ゐ、る。

和ハ、身分の異なる自分自身に遇ふと、酒井
 を教へようとの決心した。和ハ酒井の其に沙汰
 して度にはたぐは方方した。

酒井は思ふ
死の怒
怖で、
何かに
怯人た

轆井を運ねば、
 てう是共全境突破の思ふ
 ような、
 信^{いふ}た。

子
た
る
る、
妻
は
お
老
う
た
い
頭
七
留
王

すわ
か
た
た
和
は
腰
4
p
y
キ
ナ
イ
7
ひ

救うに
私、
公衆で
成かつた。
すゝと

在 舞 人 17
 23
 持 万 拾 好 心
 冬 9
 一 方 12
 等 七 合

7

助
 15
 2
 助
 11
 2
 助
 7
 2
 助
 3
 3
 12
 助
 3

せ
 く
 と
 へ
 く
 の
 た
 へ
 た

教をうけ何事も無い。と思ふ
 と力に随ひ合ひて振舞するの
 故は何等でも教へて思ふた。
 は、狂うた能く情慾と同時に、
 異様な意味を

教才

カ
3
大
声
12
思
想
3
2
、
行
12
神
12

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

體

糸川、砂漠の一人旅の思い出

彼
と
て

か、
て、
来
所
の
結、直一

14

に
解
方
、
小
品
、
天
竺
を
採
り
た
る

12
b
4

夕
入
才
拔
~~兼~~
~~兼~~
~~兼~~
同
地
白
了
友

去

一
二
カ
サ
と、
ハ
シ
ニ
一
と
ツ
ニ
、
キ

3
4.24

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

共
整
る
か

3
 や
 1
 2
 徳
 の
 2
 わ
 く
 の
 ち
)
 T₂
 0

遷

疾勞一之
作
變
入
常
と
小
世
上
力

か
ゝ
ゝ
ゝ

和を傳へてゐる

驚く許り、暫く、彼に生命、自由を奪つやうと思つた。

和は、千ヤブキナリフの尖端の砂を弄り乍ら、沙塵の狼狽突破を物に描つてゐた。

狼狽、一そして、天幕、小箭、毛布、和は乙未等の責共に耐えろと思つた。よし、酒井に鞭打たう。と教人愈々を轉換さした。

和は、酒井を蹴起こして、彼の肩に、小箭を布、天幕。その他の一帯を重くと擔がした。そして、和は彼にカリタスの杖を振り上げ、

と叫んだ。

殺すぞ、歩め！

和は、助けを——と口籠り乍ら、狂人は走り、急ぎおめた。

和は、カリタスの杖に勇氣をそそぎ、彼の後方から進つて行つた。

時折、酒井は後方の和を振り顧みた。その度に、和はカリタスの杖を振り彼に打たせかけた。和は、狂つた彼を知りず、彼の持つてゐる

たう細う日本のおを、心に描つた。そして躊躇なきで、彼の後姿を凝視した。(完)

谷口は、無中で、蛇の頭を握り落とした。
傷のから、黒血が夥しく噴き出し始めた。

お父りも砂上に投げ落された蛇を、這い出
す前に酒井が、長靴の踵で砂中に踏み込んだ。
頭部を砂の中に埋めさせて、蛇はそり瓦の鈴
を引く振り鳴らすのであった。

谷口は、顔面蒼白になり、砂の上に、夕
匂の夕。秋山は、直ぐに、腹の上に口を咬り付
け、毒を吸い出し、秋山は、口一杯
血を咥え、黒血を砂にべり吐いた。

やうやく人同意識を取り戻した谷口が、
お木は、お木、死めた人か、と叫んだ。

荒つぱり吐息を繰り返す、谷口は大陸の
道を渡すのだった。蛇毒が、心臓を回り始めた
のだった。五分位経て、谷口は顔面神経を二
三度痙攣させた。そして、秋田を突き離して
叫喚するのだった。

死ぬる——さう私は思ふ、在り谷口を見
守りてゐた。私は、谷口の血眼に醒れ、
和自身に人になりさうな恐怖感に慄然とした。

酒井が舞かじ目醒めた。酒井は黙つて、聲
を茫然として静かな方に首を曲げた。

「偉い、この戦部、腹の上にのりこを捲つて
みやがさ」

舞山は悲憤た鼻を絞つて泣いた。夕分、

蛇は突然、男から遁れ、人面鼻と浮しさを
惹き、天幕のやに這入り、またのたうち

三回分も這たうち。鈴の音がハタと止ん
だ。おやーと忍び、私はまた驚き顔を奪

めた。その時、一瞬、天幕の入口に寝てある
谷口が目醒めた。鈴の音がや

た理由を直感した。谷口は、目醒めた瞬間
鈴蛇を起す、両腕を突つて伸べをし

うと一、半身をけうりと起こした。その
刹那、鈴蛇は、谷口の右頬に噛みつたのだ

った。

「フ」と一声喚び、谷口は跳あ上つた。
谷口の頬に噛み付く、蛇は尻尾をけう付

かした。

ヤリ 4リ 4リ 4リ 鈴の音が極く。

糸を交した。

何に、さし4、はあ、さし4と酒井が鼻
声で秋山ノ耳に口を寄せた

「さし4」に秋山が加へるう声で囁いた。

二人は途方に暮れた。久野曰く、酒井が
急に立ち上つて、天幕の外に走り出た。そ
こ、糸が不審かつてみる目に、サオテノ実
を一個握つて来た。酒井はサオテノ実を
刺して、中身を細長く、丁度さし4の形に切
り、一片を糸に穿ち出した。この糸は、

「何さ、さし4、さし4よ」と秋山の口
押したんだ。が、周囲を待たず、吐き出して
了つた。秋山が咽喉を鼻に挿れ、何も受け

取らうと力づくに、腹痛を起さしたサオ
テノ実には、本意の糸に吐くのをう。と糸
は考へるのひあつた。

秋山は刻一刻、糸を感いてやつた。

「やういふ来、俺は悪くした」無山が、死
骸に取り憑るやうな顔をした。

由三、俺は、俺は二時目と言ふもの、どう
するとも来なうとした。動けなうた
んだ。やういふ来（無山は、喉泣き續けた
。

死、この希気なう答への死體を見て、和男
總身は死の恐怖に身震うした。

死ぬもんか、死ぬものか（和は尤當に驅
れて、唇を嚙み結んだ。

大隅が込んで、天幕を巻いて、出発（の用意を
した。

（理めなう）
和は、和男の表情に許した。

（一）
和上に解斗した和の死體が、今の和の弱
り甚に映った。和は意附た。と和は答への
死を眺めながら、眠りしり無山の

朝の三時、一日中で最も涼しい時刻に、秋
山は動け方と方にて、途中であつた。アッ
た、秋山は

あつ、あつた。水と水と。水と水と。
道井は肩あつ、彼の水管を却つてやつた。

それから、一里程の山立を越して、あつた。
道井は、あつた。地平線の真面正に、ほろめく
光の明滅するのを認めた。秋山は、あつた。
と直ぐ、秋山が、あつた。秋山は、あつた。

大陽が頭上から威嚇してゐた。

「あゝ、起き〜（云々）」

秋山の声で、而も、肩を揺す振られて、

は眼を醒ましめた。

「俺は、死にゐる」

なあに

秋山は、腹中をさきだして、両手で絞るや

うに押壁に〜ゐる。烈〜腹鳴りが聴こ

のは、大膽犬をあて〜ゐるがらう。

「うんと、痛〜」

「うゑ、起きまうと思つてゐたが〜」

「酒井、あゝ、酒井」 秋は酒井の腕を引つ張

つた

「あゝ、〜」 亮白した瞳を酒井は秋に向

けた。

「秋山、〜」 秋山は〜

秋山の唸り声が酒井の心を驚倒した。酒井

が跳ねあがきた。秋人び、

酒井を殺害して、私は獨り国境を越え、
 国境へは直ぐに。狂人を運本へ頼むので、
 自ら自身の生命に關する。と私はそれだけ
 心に在る。

「さうねえ、あゝ、」 和加言ふた。久、酒井は
 絶え、死、恐怖で、何かに驚く。とある。
 和は腹のややキナリ初を抜いて、彼の腹
 に挿れた。併し、彼は、あゝ、天の一言、血
 眼を睨み、何の祈禱の恰好をして坐つてあ
 る。

和すのは何でもあり。さう思ふ、決して下るも
 、和の教養心は、彼の美加やたを事に感ぐ
 るのである。そして、彼が立つたうと待
 ち構へてみると、